

ロドコッカス・エクイによる肺以外の病変

門別診療所 三浦 耀平

種付けも落ち着き、子馬の病気が増えてくる季節になりました。今回はそれらの疾患の中でも、生産牧場にとって大きな経済的損失を招くロドコッカス・エクイ感染症についてお話したいと思います。ロドコッカス・エクイ（以下 R. equi）が子馬に肺炎を引き起こす事は多くの方が既に知っておられるでしょう。しかし中には、肺以外にも病変を形成することがあるのをご存知でしょうか。本感染症については、過去のよもやま話でも掲載されておりますのでこちらも参考にして頂きたいです。ここでは主に、予後不良となりやすい肺炎以外の病態について改めて紹介したいと思います。

○腹腔内膿瘍

R. equi が血行性に移行、あるいは痰とともに経口摂取されることによって、腹腔に病変が形成されと考えられています。症状として発熱に加え消瘦や下痢が見られることがあります。また腹痛症状の原因にもなり得ます。これは腸管などの隣接組織に膿瘍が癒着し、正常な腸蠕動を妨げるからかもしれません。診断には腹部の超音波検査が有用です。（写真1）この場合、疼痛が治まらなくても手術適応とはなりづらく、内科的な治療が選択されます。

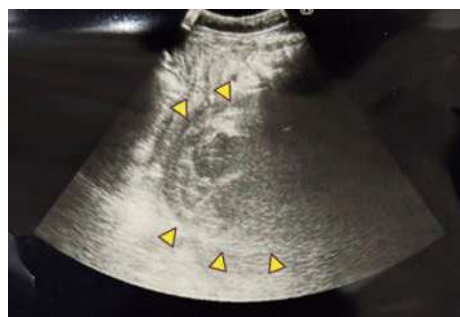
○ブドウ膜炎

前眼房内（角膜の下空間）に繊維素性あるいは膿性の滲出物を認めます。眼に白色～黄色や緑色がかった変色が見られます。（写真2）馬の眼疾患の多くを占める潰瘍性角膜炎と間違えないように注意しましょう。肺などの他組織で増殖した R. equi に対する過剰な免疫反応により二次的に発症すると考えられて来ましたが、最近の報告では、R. equi が血流に乗って眼に直接的に感染を起こしている可能性も示唆されているようです。

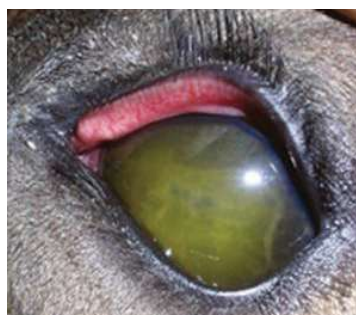
○骨髓炎・関節炎

R. equi は子馬の運動器にも影響を及ぼします。骨髓炎では跛行を呈します。レントゲン検査が診断に適しています。多発性滑膜炎では複数の関節で関節液の貯留が認められますが、跛行は伴いません。（写真3）このような時は R. equi が関節液から検出される事も稀であり、非化膿性の免疫介在性による関節炎であると推察されます。一方、跛行を伴い、関節液より本細菌が検出される化膿性関節炎の症例も見受けられます。上記に示した病変を呈した場合、一般的な肺炎のみの時と比較して治療は困難となります。その理由としては①発見、対処の遅れ、②耐性菌の存在、③抗菌薬移行の乏しい部位での病巣、④子馬の移行免疫不全が挙げられます。長期間の抗生剤投与により治

癒する症例もありますが、労力と費用をかけた挙句死亡してしまう場合が多いです。また、そのような子馬を長い間抗生剤を投与しながら生かすことで、耐性菌を牧場内に蔓延させてしまう事にもつながる恐れがあります。治療するかどうかの判断は、これらの事を牧場と獣医が互いに把握した上で選択する事が大切です。そして、呼吸器症状が無く、超音波検査で肺に病変が見つからなくとも、他の様々な症状からロドコッカス・エクイ感染症が疑われる事を認識しておくといいかもかもしれません。



（写真1）筆者症例 腹腔内膿瘍を疑う超音波検査



（写真2）『Color Atlas of Diseases and Disorders of the Foal』より



（写真3）筆者症例 免疫介在性関節炎を疑う両飛節の関節液貯留